

静岡

伊豆の国市にある「葦山反射炉」が、平成23年6月、「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産候補に追加され、世界文化遺産登録に向けて第一歩を踏み出した。現在、平成27年度の登録に向けて準備が進められている。

19世紀末から20世紀初頭、極めて短期間に近代化を成し遂げた日本の成功を支えたのは、鉄と石炭と造船であった。そして、それらに関わる一連の産業遺産の世界文化遺産への登録を目指しているのが「九州・山口の近代化産業遺産群」(以下「九州・山口」)である。鹿児島市の旧集成館や佐賀市の三重津海軍所跡、長崎市の長崎造船所ハンマーヘッド型起重機や端島炭鉱(通称、軍艦島)、大牟田市の三池炭鉱関連施設、北九州市の八幡製鐵所、萩市の萩反射炉など、現在稼働しているものも含めて九州地方および山口県に存在する多くの産業遺産が構成資産候補に名を連ねている。その中に30番目の資産として葦山反射炉も加わったのである。

ではなぜ、「九州・山口」の構成資産候補に伊豆の葦山反射炉が選ばれたのか。その答えは幕末における西洋からの製鉄技術の導入と伝播という点

にある。幕末期の日本では、諸外国に対する防御策のひとつとして、西洋砲術を取り入れるとともに鉄製の大型砲を製造するため、佐賀藩や薩摩藩などで反射炉が築造された。

反射炉とは、17～18世紀にヨーロッパで発達した鉄を溶かすための溶解炉である。構造としては内部の天井がドーム状になった炉体部と、高い煙突からなっている。石炭などを燃やすことで発生させた熱を炉内の天井で反射し、一点に集中させて千数百度の高温を実現する仕組みである。

佐賀藩や薩摩藩では、入手した蘭書をもとに在来の鋳物師たちの技術も援用しながら、試行錯誤を経て反射炉を造りあげた。その一方で、葦山代官江川太郎左衛門英龍(坦庵)の進言によって安政元年(1854)に築造が開始され、約3年をかけて完成したのが葦山反射炉である。ここでは品川台場に配備するための大型砲などが鋳造された。

江川英龍は、優れた代官であるとともに蘭学にも通じており、幕府の海防政策の実務責任者でもあった。佐賀藩主鍋島直正とも親しく、西洋砲術や台場、反射炉などについて佐賀藩と緊密に情報交換をしていた。そうした関係から、葦山反射炉築造に際して佐賀藩は技術者集団を葦山に派遣し、技術協力を実施している。日本に導入された西洋の技術が、日本国内で伝播していった顕著な例と言える。

さらに、佐賀や薩摩の反射炉は現存しないため実際に稼働した反射炉としては、世界で唯一残っているのが葦山反射炉なのである。この点も「九州・山口」の構成資産候補に選ばれた理由である。

葦山反射炉は、大正11年(1922)に国の史跡に指定されており、その歴史的な重要性は早くから認められていた。また、地元の市民にとっても葦山地区を代表するランドマークのひとつとして長年にわたって親しまれてきた。この世界遺産登録への動きをきっかけに、改めて葦山反射炉の歴史的な価値や保存の必要性を周知し、市民・県民の誇れる遺産として登録に向けた運動の輪を広げていくことが求められている。

葦山反射炉、世界遺産登録への取り組み



葦山反射炉

神奈川

日本の鉄道発祥の地・横浜に来年夏、世界最大級の鉄道模型博物館がオープンすることになった。三井不動産が、みなとみらい21(MM21)地区に建設中の自社ビルに文化交流施設として開設。鉄道マニアとして知られる原信太郎さん(92歳)＝兵庫県芦屋市在住＝が全面的に協力し、自作を含めたコレクションの一部、約1000両を貸し出す。

「横浜三井ビルディング」と命名された三井不動産の自社ビルは、JR横浜駅から徒歩約5分、地下鉄みなとみらい線新高島駅から同2分とアクセスに恵まれている。隣接地には日産自動車のグローバル本社、劇団四季の劇場「キャノン・キャッツ・シアター」、富士ゼロックスの研究開発拠点「R&Dスクエア」などが、ここ2年ほどの間に相次いでオープンした。

こういった好立地を活かすとともに、ビルに付加価値を付ける目的で、「世界鉄道模型博物館」(仮称)の開設を決めた。地上30階(塔屋3階)、地下2階建て、延べ床面積約9万平方メートルのビルの2階部分を使用。世界最大といわれるドイツ・ハンブルクの「ミニチュア・ワンダーランド」に匹敵する規模と質の鉄道模型博物館を設ける。

展示の目玉は、全長数百メートルの線路を軌道幅45ミリの特大模型が疾走する「1番ゲージレイアウト」、横浜の今昔風景を模したジオラマの中を軌道幅16.5ミリの模型が走り回る「H0ゲージレイアウト」など。このほか、オリエント急行や戦前の金剛山電気鉄道など世界各国の新旧鉄道の模型、東海道新幹線や丹那トンネルなどの開通時の「一番切符」も展示される。

原さんは、中学生のころから鉄道模型の製作・収集に没頭した。戦時中に東工大を繰り上げ卒業し、学徒動員を経て、文房具・事務機器の総合メーカー「コクヨ」に勤務。同社で専務取締役になりまで上り詰めたが、サラリーマン生活の傍ら、コレクター人生を極めることも忘れなかった。制作した模型は1000両、収集品を含めると6000



横浜・MM21地区に建設中の横浜三井ビルディング(左)。中央は日産自動車のグローバル本社、右は富士ゼロックスのR&Dスクエア。手前の低層建築物は「キャノン・キャッツ・シアター」

世界最大級の鉄道模型博物館 横浜に来年夏開館へ 三井不動産が収集家の協力で

両は下らない。趣味が高じて、1990年には自宅に私設の「シャングリ・ラ鉄道模型博物館」を開設した。シャングリ・ラとは、英国の作家ジェームズ・ヒルトンの小説「失われた地平線」に登場する地名で、そこから転じて「理想郷・桃源郷」を意味する。同博物館には畳100畳分の鉄道ジオラマがあり、原さんはオリエント急行の客車を模した小部屋の操縦席に陣取って模型三昧の生活を送っているという。

原さんの次男の健人さん(56歳)＝会社経営、芦屋市在住＝によると、原さんは4、5年前まで鉄道模型を製作していた。「父は単なる鉄道マニアではなく、模型の製作・収集を通じて『ものづくりの大切さ』を伝えようとしている」と健人さん。世界鉄道模型博物館にもその精神が受け継がれるよう、健人さんらは来年夏のオープンに向けてプランのチェックに余念がない。